

オーストリア皇妃エリザベートの死をめぐる報道

大井 知範

要旨

1898年9月10日、オーストリア皇妃エリザベートがスイスのジュネーヴで暗殺された。イタリア人無政府主義者によるこの凶行は、オーストリアのみならず世紀末のヨーロッパ全体を震撼させる一大事件となった。当時の彼女は長らく公務を離れ、病氣療養の旅に明け暮れる「流浪の皇妃」であった。とはいえ、エリザベートが巨大な帝国の皇妃であることには変わりなく、国民の目が向けられる対象であり、国民と向き合う立場にいる特別な女性であった。そのような国の頂点に立つ女性の突然の謀殺を、当時の国民はどのように受け止めたのだろうか。

本稿では、皇妃エリザベートの訃報と葬礼に帝都ウィーンの社会がどのような反応を示したのか、当時の新聞に掲載された記事を手がかりにその動きを明らかにした。また、新聞各紙の論調にも注目し、皇妃エリザベートの死をメディアがどう具体的に論評したのか言説を探った。こうして浮かび上がる社会の反応は、驚愕、悲嘆、憤激、同情の錯綜ともいえるようなものであった。つまり、新聞の報道が伝える人々の言動からは、単なる「哀悼」という言葉では言い尽くすことができない複雑で多元的な心性が読み取れる。くわえて、挿絵と写真入りの専門各紙を併用することで、皇妃エリザベートの死がどのように可視化され表象されたのか、視覚的な面から踏み込んだ考察を加えた。挿絵と写真を使った視覚表現という点では、①事件現場と犯人の顔、②棺の帰還と葬儀の様子、③追想される皇妃の生涯、④残された皇帝という4つの対象が報道から浮かび上がる。前述の複雑な感情の入り混じりは、こうして視覚的な側面からも強められる効果を生んだのである。

The News of the Death of Austrian Empress Elisabeth

Tomonori Oi

Abstract

On 10 September 1898, Empress Elisabeth of Austria was assassinated in Geneva, Switzerland. This murder by an Italian anarchist shocked not only Austria but also Europe at the end of the century. At the time, she had been a "wandering empress" who had long been away from her official duties and spent her time traveling to recover from illness. Nevertheless, Elisabeth was still the empress of a huge empire, the object of the public's attention, and a special woman in a position to face the public. How did the people of the time accept the sudden murder of the woman at the top of the country in this way?

The purpose of this paper is to use newspaper articles contemporary to the incident, in order to piece together how society in the imperial capital of Vienna reacted to the news of Empress Elisabeth's death and her funeral. This paper also considers the tone of each newspaper, exploring the discourse on how the media specifically reviewed

the death of Empress Elisabeth. The social reaction that emerged was what could be described as a complex emotional mix of astonishment, grief, indignation, and sympathy. In other words, the words and actions of people that can be read from these newspaper reports reveal a multifaceted mindset that cannot be fully expressed by the mere word "condolence." In addition, the use of illustrations and photographs in the various specialized newspapers provided an in-depth examination of how the death of Empress Elisabeth was visualized and represented. Four tendencies can be identified regarding the subject matter of visual expressions created using illustrations and photographs: (1) the scene of the incident and the face of the culprit; (2) depictions of the funeral and the return of the coffin; (3) reminiscences of the life of the queen; (4) the surviving emperor. The aforementioned complex mix of emotions thus as well produced a visually intensified effect.

はじめに

1898 年 9 月 10 日、オーストリア皇妃エリザベートがスイスのジュネーヴで暗殺された。イタリア人無政府主義者によるこの凶行は、オーストリアのみならず世紀末のヨーロッパ全体を震撼させる一大事件となった。アナキストによる要人の襲撃は、たしかに当時頻繁に各地で起きており、その前後にもフランス大統領、アメリカ大統領、イタリア国王がテロの犠牲となっていた。しかし、政治とは距離を置く高齢の皇妃、しかも病氣療養中の無防備な 60 歳の女性が旅先で暴漢に襲われた惨劇は、人々にとりわけ大きな衝撃を与えた。そのため、事件の数カ月後にはヨーロッパ 21 カ国の治安責任者がイタリアに集い、アナキストの取り締まりと犯罪捜査の協力に向けた国際会議を持つことになった。この会議が一つのきっかけとなり、後に創設されたのが国際刑事警察機構（インターポール）である⁽¹⁾。ヨーロッパ屈指の権威を誇る王朝を襲った悲劇は、それだけ世界に大きな衝撃をもたらすことになったのである。

ところで、絶世の美女と謳われた皇妃エリザベートの波乱に満ちた生涯は、映画や書籍、ツーリズムなどを通して今日でもよく知られている⁽²⁾。とりわけ、1992 年にウィーンで誕生したミュージカルが彼女の知名度を飛躍的に高めることになった。ミュージカル『エリザベート』は初演の 4 年後に日本へ渡り、今日最も人気のあるミュージカル作品の一つとして上演回数を重ねている。また世界でも、ヨーロッパとアジアを中心にこれまで 14 カ国で公演が催され、国や言葉の壁を越え多くの人々がこの作品に魅了されている。

では、ミュージカル『エリザベート』において先ほどの皇妃暗殺のシーンはどのように描かれているのだろうか。日本には宝塚版と東宝版があるが、後者を例に取ってみよう。物語の最終盤、それまで舞台の進行役（狂言回し）をシニカルに演じてきた無政府主義者ルキーニは、黄泉の帝王トート（Der Tod：ドイツ語で「死神」の意）から刃先の尖ったやすりを渡され、公道を歩く皇妃の胸を一突きする。エリザベートはその場に崩れ落ちる

もののやがて自力で立ち上がり、歩み寄るトートに気づくと晴れやかな表情で抱擁し、トートの口づけに導かれて黄泉の世界に旅立つ。ボロボロになり傷つきながらも人生を必死に生き、自由の世界を渴望し命果てたエリザベート。その生涯は、「死」との愛の成就というハッピーエンドの形で舞台の幕は閉じられる。

このようにミュージカルでは感動的な終わり方で表現されるが、現実のエリザベートの死は残忍な刺殺事件によってもたらされた。しかも彼女は単なる犯罪の一被害者ではない。彼女は巨大な帝国の「皇妃」であり、全国民の注目を浴びる特別な存在であった。そのような国の頂点に立つ女性の死を、当時の国民はどのように受け止めたのだろうか。この皇妃エリザベートの死に対する社会の反応については、これまでの歴史学においてはさほど関心が向けられていなかった⁽³⁾。彼女が宮廷と距離を置く「流浪の皇妃」であり、国政の面では重要な人物でなかったこともその理由であろう。こうした研究の動向は、単に暗殺事件の局面だけにとどまらない。エリザベートと社会の関係性そのものが、いまだ十分には解明されていないのが現状である⁽⁴⁾。

そこで本稿では、皇妃エリザベートの訃報と葬礼に帝都ウィーンの市民がどのような反応を示したのか、当時の新聞に掲載された記事を手がかりにその町中の様子を探る。また、新聞の紙面に見られる論説に注目し、皇妃エリザベートの死をメディアがどのように論評したのか言説を読み取ってみたい。ここで用いる史料は、当時のウィーンを代表する2紙、すなわち公報の性格を持った保守系の伝統紙『ウィーン新聞 (Wiener Zeitung : WZ)』とリベラル系の有力紙『新自由新聞 (Neue Freie Presse : NFP)』が中心となる。くわえて、挿絵・写真入りの専門各紙を併用することで、皇妃エリザベートの死がどのような図像によって表象されたのか、視覚的な側面からも考察を加えてみたい。

1. 皇妃の死に対する国民の反応

(1) 事件の第一報と国民の反応

1898年9月10日、皇妃暗殺の悲報は電信によって即座に帝国の全土へと伝わった。当時の新聞から読み取れる各地の様子や動きは以下の通りである⁽⁵⁾。

事件の速報は死去の数時間後には帝都ウィーンを駆けめぐり、人々は大きな驚きと深い悲しみをもってこのニュースに接した。通りや公共施設にはすぐさま弔旗が掲げられ、オペラ座、ブルク劇場、カール劇場などでは軒並み公演が急遽中止された。ほかに、プラターターのテーマパーク「ウィーンのヴェネツィア」や皇帝在位50周年記念博覧会も営業と音楽演奏を停止し、華やかな装飾は撤去され夜を彩るイルミネーションも消された。芸術の秋を迎える「音楽の都」は突如静まり返り、街全体が重苦しい異様な雰囲気包まれたのである。市民は詳しい情報を求め新聞社やホーフブルクの王宮に殺到し、読み上げられ

る号外の内容を聞きながら涙を流す女性たちの姿も見られた。宮廷と政府が受けた衝撃も大きく、とりわけ、夫である皇帝フランツ・ヨーゼフ1世の反応（後述）は人々の涙を誘った。シェンブルン宮殿で急報に接した皇帝は、王宮へ戻らずその後5日間にわたり宮殿にとどまり、遠方から駆けつけた娘たちと悲しみを分かち合いながら遺体の帰国を待つことになった。

帝都以外でも、事件当日の夕方には国内の主要都市に第一報が伝わり市民の間に大きな衝撃が走った。人々は情報を求め新聞社や市街地に殺到し、号外で凶報を知った人々は愕然とし、犯行に憤慨する者も多く見られた。悲嘆のムードに包まれるなか、文化娯楽イベントはすべて中止となり、開演中の公演は途中で打ち切られ観客は重苦しい空気に包まれながら劇場を後にした。なお、速報は当日のうちにヨーロッパ諸国にも伝わり、新聞の号外を読んだ市民や各国の王侯貴族の間に激震が走った。翌日、外務省には各国の外交官が弔問に訪れ、弔電も世界中から続々と届いた。

暗殺事件に対する怒りと悲しみの大きさは、皇妃と特別な情で結ばれていたハンガリーにおいてとりわけ顕著に表れた。午後6時ごろに悲報がブダペストに知れ渡ると、驚きと悲しみに打ちのめされた市民は新聞社や政治クラブの前に群がり、街は騒然とした雰囲気包まれた。首相から情報を伝え聞いた大臣や議員たちは悲痛に耐えられず涙を流し、党派、身分、階級の違いを超えて「王妃」を失った痛みがハンガリー国内で共有された。ブダペストの通りや建物には、他の帝国都市と同様に弔旗が掲げられ、劇場の公演もすべて取り止めが決定した。訃報に打ちのめされ取り乱す者、号外を求め騒動を起こす者もいたが、大半の住民は自制を保ちながら重く沈んだ表情で愛する「ハンガリー王妃」の死を悼んでいる。

帝国内の各都市は、事件翌日以降も哀悼ムード一色であった⁶⁾。市内の至るところには弔旗がひるがえり、商店のショーウィンドウには皇妃の胸像や肖像が花飾りとともに並んだ。各地の教会では皇妃の死を悼む鐘が鳴り響き、劇場は臨時休業により静まり返った。こうした街の光景とともに、各紙には追悼の社説や記事があふれ、それと並んで事件と皇妃の最期をめぐる詳細も明らかになった。たとえば、同行していた女官スターライ (Irma Sztáray) の証言、救護に従事した船客のインタビュー記事、犯人を取り押さえた通行人や目撃者の証言などが紙面に掲載され、皇妃がどのように悲劇的な最期を迎えたか国民は知ることになった。また、事件の翌日にはジュネーヴで遺体の検死が執り行われ、死因は刃物による刺し傷であることが公表された。

新聞の紙面では、ほかにも警察による捜査状況に連日大きなスペースが割かれていた。現場検証や犯人の取り調べ、さらには各国の捜査当局によるルッケーニ (Luigi Lucheni : ミュージカルでは「ルキーニ」の役名) の身元調査や無政府主義ネットワークの追跡が続けられ、動機の解明と背後関係の捜査が進められた。この事件は、現場となったスイス一国で処理できる案件ではなかった。というのも、フランスで生まれ育ったイタリア人がオー

ストリアの皇妃をスイスで暗殺した、まさに多国間にまたがった事件であること、何よりも無政府主義とは文字通り国境をまたいで活動する国際テロリズムであったからである。ルッケーニの供述内容も新聞には掲載され、犯行に至る経緯や動機が次第に明らかになった。特に人々の怒りを増幅させたのが取り調べ中の彼の態度に関する記事である。ルッケーニはたびたび不敵な笑みを浮かべ、無抵抗の女性をあやめたことに対する良心の呵責を感じることはなかった。アナキズムの主張と理不尽な犯行動機を平然と誇らしく語る彼の態度は、皇妃の死を悼む新聞読者の怒りに火をつけたことであろう。

(2) 皇妃の帰還

事件の翌日である9月11日夜、皇妃の棺を引き取るための特別列車がウィーンを出発した。ジュネーヴへ向かうその車内には、皇妃付の執事長、侍従や女官が遺体引き取り使節として乗り込み、皇妃に長年仕えた側近で親友のハンガリー人女官フェステティッチャ(Marie Festetics)の姿もそこにあった。

9月14日朝、皇妃の棺は安置所となっていたレマン湖畔のホテルからジュネーヴ駅へ搬送され、ウィーンから到着した特別列車に移された。ちなみに棺と調度品は、ウィーン・ホーフブルクの製作所で用意されジュネーヴへ搬送されている。棺を乗せジュネーヴを発った列車はスイスを横断し、オーストリアとの国境を越え目的地のウィーンをめざした。列車が通過する各駅では、停車中に市内すべての教会が鐘を鳴らし、出迎えた聖職者、喪服姿の公職者、軍人、儀仗隊、旗を持った学徒や教師、さまざまな社会团体(商工会議所、赤十字、女性団体など)のメンバーや大勢の住民が皇妃の棺が納められた車両を見送った。特にザルツブルクやリンツといった大都市では見送りの人出は大規模なものとなり、何千人もの住民が悲痛な面持ちで駅に押し寄せた。駅構内だけでなく市街地でも、家々には弔旗や哀悼の飾りが施され、消防士たちがたいまつを掲げ特別列車を見送った。各駅での短い停車時間のさなか、車両には葬礼用の花輪が運び入れられ、下車した随行使節団が市の代表者と軽い挨拶を交わし特別列車はホームを後にした⁽⁷⁾。

9月15日、皇妃の棺を待ち受ける帝都は重々しい雰囲気包まれていた⁽⁸⁾。「いつもは生きる喜びに満ちあふれたウィーンが悲嘆の都市に変貌し」⁽⁹⁾、黒い旗や弔意を示す飾りで市内一帯が覆われた。昼ごろから通りには多くの人々が繰り出し、夜になる頃には人出はかなりの数に膨れ上がった。とりわけ、王宮へ向かう葬列が通過するマリアヒルファー通りには前例がないほどの群集があふれ、動員された大規模な軍隊により厳重な警備体制が敷かれた。

午後10時、8両編成の特別列車がウィーン西駅の2番線ホームへ入線した。迎え入れのために特別な改装が施されたターミナル駅には、将軍たち、1,400人の将校団、聖職者、ウィーン市長・副市長、宮廷職員などが待ち受け、儀仗隊やろうそくを持った鉄道職員500人も整列していた。特別列車の7両目に安置された棺は、近衛兵によって車両から駅

舎に移された。特設の葬礼室となったウィーン西駅の皇室用貴賓室は、黒い布と双頭の鷲をあしらった皇妃の紋章が壁を覆い、床には黒い絨毯が敷かれていた。部屋の中央に棺台が設置され、その周囲には花、装飾、燭台、キリストの十字架像などが並べられ、聖職者による短い儀式が執り行われた。その後、棺は華麗な彫刻を施された黒色の皇室霊柩馬車に移され、宮廷スタッフの馬車とともに王宮へ向かう葬列が編成された。

ウィーン西駅を出発した葬列がマリアヒルファー通りに入ると、沿道では数時間前から並んでいた何十万人もの民衆が脱帽し霊柩馬車を静かに見送った。通りに面した家々の窓とバルコニーにも多くの人だかりができていた。時々ざわめきが聞こえる以外は静寂に包まれ、大人数にもかかわらず乱れることなく整然と葬列を見送る群衆の様子が新聞でも報じられている。「舗道には砂がまかれ馬のひづめの音が聞こえなかったことで、夜の闇に包まれた幻想のように、この陰鬱で華美な葬列は神秘的で静まり返ったまま通り過ぎて行った」⁽¹⁰⁾。

やがて葬列が王宮に達すると、ブルク広場に集まった何千人もの民衆は脱帽し、王冠（屋根）と双頭の鷲（側面）に包まれた霊柩馬車を静かに迎えた。ここでも、衛兵のドラムの音や女性たちのすすり泣き声以外は静まり返っており、聖職者たちが葬列をまず出迎え、棺は王宮の聖堂へと運ばれた。シェーンブルンから馬車で到着していた皇帝は、元帥服と外套姿で皇族とともに棺と対面し、黒色で装飾された聖堂内の台座に置かれた棺の前で聖職者による簡単な儀式が営まれた。

このときの皇帝の様子については『新自由新聞』が詳しく報じている。2組の娘夫婦とともに参列した皇帝は祈祷台にひざまずき、繰り返しむせび泣きながら祈りを捧げていたという。儀式の後、皇帝は棺台に近寄り両腕を広げ棺の頭部にひざまずき、頭を沈めたまま激しくすすり泣き蓋に口づけをした。この光景を見た者たちは、みな声を上げて涙を流していた。周囲の者たちが退出後、皇帝は娘夫婦たちとさらに5分ほどその場に残り、沈み込んで静かに祈りを続けたという。控えの間に移動した皇帝は、妻の最期に立ち会ったスターライに歩み寄り、「皇妃はたいそう苦しんだのかい？」と尋ねた。それに対しこの女官は、「いえ苦しまなかったと思います、陛下。皇妃陛下はまもなく昏睡状態となり息を引き取られました」と答え、深々とお辞儀をするスターライを皇帝は両手で起こし優しく慰めた⁽¹¹⁾。

翌9月16日、王宮聖堂に安置された棺は、朝8時から夕方5時まで一般の市民に公開され、およそ1万人が皇妃との別れを惜しんだ。皇妃の顔を拝めると期待した人々は、遺体が棺に閉ざされていたため失望の念を隠せなかったが、午後になっても来場者は絶えず、入場規制や軍隊による周辺の交通整理が徹底された。王宮周辺だけでなく、この日は市内各所でも尋常ではない人出が見られ、市民は皇妃について語り合い、悲しみを共有する様子が見られた⁽¹²⁾。

(3) 葬礼

9月17日、葬儀の日を迎えたウィーンは、午前中から市の中心部に人があふれ、正午を過ぎるころには身動きが取れないほどの群集でごった返した。「ウィーンではこれほど印象深い葬儀を過去に見たことがないとおそらく言ってもいいだろう。我が皇妃に対してウィーンの人々が常に心からの愛情をどれほど注いでいたかここによりやくはつきりと示されることになった」⁽¹³⁾と、新聞でもその様子が報じられている。葬場のカプツィーナ教会には、聖職者、外交団、外国の軍人、皇族、政府や市の要人など、招待された参列者が続々と到着し、午後3時を過ぎると会場内は人でいっぱいとなった。そこにはヨーロッパ各国の君主や王族の顔も見られ、ほどなくしてオーストリアの元帥服に身をまとった皇帝がドイツ皇帝とともに教会に姿を現した。

午後4時、葬儀の開始を告げる鐘が鳴り、王宮の聖堂では儀式が執り行われ、棺が台から降ろされ霊柩馬車へ運ばれた。鐘の音が鳴り響くなかやがて葬列は動き出し、ミヒャエル広場、ヨーゼフ広場、アウグスティーナ通り、テゲトフ通りを經由してカプツィーナ教会に到着した。教会前のノイマルクトでは、何百人もの軍人が葬列を出迎え、そこには民族衣装に身を包んだハンガリーの代表団や聖職者の姿もあった。ノイマルクトは、一部の歩道を除き午後2時前には閉鎖されており、周辺の通りには「命の危険を感じるほどのものすごい数の群集」⁽¹⁴⁾が押し寄せていた。カプツィーナの前で霊柩馬車から降ろされた棺は、ドラムとホルンの音が鳴り響くなか、参列者が待ち受ける教会の中へと運ばれた。鐘の音が鳴り止みドラムの音とともに教会の扉が開くと、ロウソクを持った8人の小姓を伴い近衛兵が棺を屋内に運んだ。狭い教会内には大勢の司教が居並び、枢機卿・大司教グルシャ（Anton Josef Gruscha）が葬儀のミサを主宰した。その後、棺は教会内の皇室霊廟に搬送され、最後の儀式を終え皇妃の棺は廟に安置された。このときの皇帝の様子については、現場に居合わせた者が次のように語っている。

皇帝は長いこと自制を保っていたが、霊廟に入るとそれがどこかへ行ってしまったようであった。彼は祈祷台に膝から崩れ落ち、言いようのない激しい心痛に襲われていた。彼の目からは滝のようにおびただしい涙があふれ出た。大きな声ですすり泣く音が響き、彼とともに遺族も心が引き裂かれるかのように泣いていた。皇妃を納めた棺に別れを告げるのは皇帝にとって何とも辛そうであった。足台から立ち上がった皇帝は棺に接吻をした・・・⁽¹⁵⁾。

葬儀の終了後、王宮で賓客たちとの別れの挨拶を済ませた皇帝は、夕方6時前に王宮を離れシェーンブルンへ戻った。葬儀の参列者をもてなすディナーのホスト役は、皇位継承者で甥のフランツ・フェルディナント大公に委任されている。

前述のように、この日のウィーンの街頭はかなりの規模の人で埋め尽くされていた。特

に中心部では、王宮からカプツィーナへ向かう葬列を見ようと激しい混雑が起き、体調を崩す者、意識を失う者、怪我人が続出した。葬列のルートに面した家々は、窓、バルコニー、屋根に人があふれ、葬列の沿道付近では開始前に押し合いや混乱も見られた。ただ、これだけの人の数にもかかわらず、緊張と感傷的な気分ゆえ沈黙と冷静さがおおむね保たれていた。葬儀の終了後も、しばらく市の中心部では交通渋滞が続いたものの、午後5時半にはようやく人出がまばらになり始め、夜遅くになると街は静けさを取り戻した⁽¹⁶⁾。

この日、街が鎮魂のモードに包まれたのはウィーンだけではなく。帝国の各都市では、葬儀と同時刻に市内全域の教会が鐘を鳴らし、公職者や軍人、多くの住民が参加するなか追悼の祈りがささげられた。家々には黒の弔旗や哀悼の装飾、皇妃の胸像や絵が並べられ、商店は臨時休業し通りには喪服姿の人々があふれた。9月18日付の『ウィーン新聞』では、さまざまな都市の葬儀当日の様子が紹介され、たとえば、クレムス、リンツ、ザルツブルク、プラハ、ブリュン（ブルノ）、レンベルク（リヴィウ）、クラカウ（クラクフ）、モスチスカ、クラーゲンフルト、グラディスカ、パレンツォ、トリエステ、ポーラ、スプリト、ブダペストの光景が伝えられた⁽¹⁷⁾。そこから分かるのは、皇妃の死はオーストリアだけでなく、ボヘミア、モラヴィア、ポーランド、ウクライナ、イタリア、クロアチア、ハンガリーといった諸民族の居住地域でほぼ同じ方式により悼まれ、帝国の一体性を再確認する一大セレモニーになっていたということである。

2. 皇妃の死をめぐる言説と表象

(1) 新聞の論調

次に新聞の論説記事に目を移し、メディアが皇妃の死をどのように論じたかその言説に注目してみよう。事件翌日の『ウィーン新聞』は、特大の文字を使って1面全体に以下の速報文を掲載し、重大事件の発生を国民に周知していた。

ジュネーヴでの旅の途上にある皇妃／王妃陛下は、昨日10日午後1時45分、ホテル・ボー・リヴァージュから船へ向かう途中で何者かに重傷を負わされた。同じホテルに運ばれ、それから30分後、陛下はみまかられた⁽¹⁸⁾。

さらに2面以降には、皇妃暗殺という衝撃の大きさを物語る悲痛な言葉が続き、たとえば次のように事件の重大性が示唆される。

人類の高みに君臨する高貴で華麗な女性であられるエリザベート皇妃陛下が、ならず者の暗殺者による蛮行の犠牲となり崩御された⁽¹⁹⁾。

この悲報を信じたくない、我々は夢を見ているのだ、熱にうなされて錯覚しているのだ。しかし残酷な現実が我々を呼び覚ます。そしてそれが本当のことであり、振り払えない真実であることを嘆き悲しみながら悟る。皇妃は亡くなったのだ。帝国の頂点に君臨する華麗な女性がこの世を去ったのだ⁽²⁰⁾。

こうして『ウィーン新聞』の紙面では、命を奪われた「華麗な女性」の生涯が追想され、皇帝の心情をおもなばかり悲嘆に満ちたコメントが続く。さらには、事件の推移や犯人の素性を伝える詳しい情報がジュネーヴからもたらされている。翌日の報道にしてはかなり詳細で正確な記述が並ぶのは、犯人がその場で逮捕され目撃者も多数いたことによるものだろう⁽²¹⁾。

では、この時代のウィーンを代表するリベラル系の有力紙『新自由新聞』の論説を例に、当時のメディアがこの事件をどのように論評していたかをさらに掘り下げて探ってみよう⁽²²⁾。事件翌日(9月11日)の同紙1面社説には、卑劣な蛮行に対する怒りが満ちていた。高齢の皇妃には持病があり絶えず身体的な苦痛を抱えていたこと、最愛の一人息子を失い精神的な苦しみに苛まれていたことが想起され、今回の犯行はこの二重苦を背負った女性に対するあまりに非情な仕打ちであると同紙は強く非難している。また、これまで皇妃が示してきた高潔さや慈愛にも話が及び、50年間におよぶ治世のうち44年にわたり皇帝を支え続けた貢献の大きさが称えられた。その一方で、一人取り残された皇帝に対するいたわりの気持ちも記事にはにじみ出ている。皇太子を失い、今回さらに皇妃を失った皇帝の心痛を哀れみ、今こそ帝国臣民が一体となり、試練に立ち向かう皇帝に寄り添う態度が求められた。オーストリアが気高い皇妃を失った重みは、皇帝の治世50周年を迎える記念すべき年だからこそ強く実感し続けることになろうと社説は論じている⁽²³⁾。

同日付の『新自由新聞』では、2面以降に皇妃の生涯や近年の状況に関する追想が綴られている⁽²⁴⁾。生い立ちから興入れまでの若かりし頃の歩み、オーストリアとハンガリーの和解(アウスグライヒ)に果たした貢献、病気や心労で苦しんだ生涯などがそこでは回顧された。さらには、神経症を患い療養の旅を続けた晩年の様子が伝えられ、今年に入り持病が悪化したものの治療が功を奏し症状に改善の兆しがあったことも伝えている。だからこそ、快癒の希望を奪った今回の犯行は、その卑劣さをいっそう際立たせることになる。また、皇妃が病人や弱者に向けた慈愛を示すエピソードも紹介され、彼女の思想や性格を物語る数々の逸話が記事に盛り込まれた。ギリシャの古典や言語への関心、詩作に対する熱意、詩人ハインリヒ・ハイネへの陶醉など、文芸愛好家としての一面も取り上げられ、皇妃のギリシャ語教師(朗読係)による回顧と追悼文も紙面に掲載された。

このように、亡き皇妃を悼む一連の記事を通して読者は彼女の生涯を追体験し、過去のさまざまなエピソードを振り返るなかで皇妃の人物像が以下のごとく描き出される。

この高貴な女性と親しくなる機会を持った者は、彼女が完全に風変わりな女性であることを知り、驚きを隠せないであろう。つまり、彼女自身が持つ基準とは異なる尺度では完全に測ることができないような、ほとんど閉ざされ完結した性格をこの方は持っておられる。その慎ましい簡素さの裏に、さらに臆病とっていいほどの慎み深さの背後に、エネルギーに満ちた堅固な意志、明晰な頭脳、天使のような心が秘められている。皇妃／王妃はか細い声でゆっくりとお話になるが、しかし彼女が語る言葉は、平凡な言い方で恐縮だが、筋が通っているのである。まさに驚嘆すべき感覚で彼女は常に物事の核心を突き、そして個々の短いコメントは、その発言に先立って長い思考の営みがあったに違いないことを、注意深い観察者たちに推測させるのである⁽²⁵⁾。

つまり、一見すると「完全に風変わりな」皇妃であるが、彼女の人生や内面へ目を向けると、その独特の個性には相応の由来があることを人々は認識できるという趣旨である。彼女を表面的に見ることで生じるネガティブな評価は、こうしてその深層に立ち入ることでポジティブな評価へと置き換わるのである。

それに続く各日の紙面においても、『新自由新聞』は社会の様子を伝えながら皇妃の死を悼む論説を掲載している。たとえば、今回の事件に対する世間の反応は一致しているとし、「殺人と殺人犯を嫌悪する声、高貴な犠牲者への悲しみの念、重い試練を与えられた皇帝に対する深い同情」⁽²⁶⁾、こうした3つの感情が市民の間で広く共有されている様子を繰り返し報じている。さらに注目すべきは、一人息子に先立たれた「悲運の母親像」というイメージの再生産である。

はてしない母親の愛情。しかし唯一の息子の喪失を嘆き悲しむ母親の心の痛みも無限であるのかもしれない。涙はかれ、引き裂かれた心は絶望的な孤独のなかをさまよう。まったく独りぼっちで！⁽²⁷⁾

このように、9年前の息子の自殺がもたらした皇妃の苦しみと孤独への同情が記事には強く表れていた。皇太子の自殺は国民を悲痛に陥れたが、「皇妃には心にその痛みをとどめることが課せられていたのである。未来の希望の星となる存在を失った全オーストリアが被った痛みを」⁽²⁸⁾と、母親であり皇妃である彼女がその痛みを一身に背負いながら晩年を過ごした様子がそこでは言及されている。それゆえ、「皇妃は外国語と文学に熱中することで気晴らしを探し求め、母親の心を押しつぶした不幸の陰鬱な影に繰り返し追い立てられていた」⁽²⁹⁾のであり、ギリシャ語の勉強、ホメロスやハイネの詩への陶醉、海や山への度重なる散策は、愛する息子の死に起因する衝動とされた。それでも、「暗澹とした運命によってもぎ取られた息子のことを彼女は忘れることができなかった」⁽³⁰⁾と推し

量り、ウィーンを離れ公衆の前に姿を現さない皇妃のさすらいには十分な理由があったことに理解が示される。しかしながら、安らぎと忘却を求めて遠方への旅に出た彼女に対し、旅先でも神意の容赦ない仕打ちが待ち受けていた。この非情な運命に対し、皇帝と国民はともに涙を流し亡き皇妃を弔うことの大切さを同紙は読者に呼びかけるのであった。

こうして、さまざまな苦しみを抱えながら遠方で散った「悲劇の皇妃像」が形作られることになり、とりわけ、生前の彼女が死を渴望していたようにも感じられるだけに、皇妃が抱えた心痛の大きさが想像される。

自身の全存在のなかに浸み込んだ繊細な美意識のなかで、彼女は性急で目立たない死を願っていたのであり、限らない不幸の雨を浴び続け苦しめられた彼女の魂は、自身がどれだけ憐れであったかを誰にも悟らせないためにはるか遠くへ突き進んでいた。そして性急に彼女は亡くなったのである⁽³¹⁾。

(2) 可視化された皇妃の死

19世紀末のこの時代、ドイツ語圏では発行部数の多い大衆新聞が登場し、近代化の進展とともに都市部で台頭する市民層にそれらは広く読まれた。とはいえ、新聞はいまだ活字が主体であり、広告欄を除いてイラストや写真が掲載されることは稀であった。『ウィーン新聞』や『新自由新聞』といったオーストリアを代表する新聞も、この当時の紙面は文字で埋め尽くされており、皇妃の暗殺を報じる連日の記事欄にも挿絵や写真は登場しない。一方で、文字だけでなくイラストや写真を紙面に盛り込み、ビジュアルを重視した専門紙も19世紀半ば以降のヨーロッパでは増え続けていた⁽³²⁾。主に週刊発行の形態を取ったこれらの絵入り新聞は、定期購読や街頭販売だけでなくカフェやクラブなどにも据えられ、19世紀の人々の世事に対するイメージ形成に一定の影響を持つようになる⁽³³⁾。

では、これらの視覚メディアは、皇妃の死をどのように表象したのであろうか。ここでは、当時のオーストリアにおける代表的な絵入り・写真入り新聞である『オーストリア絵入り新聞 (Oesterreichische Illustrierte Zeitung : OIZ)』、『興味新聞 (Das Interessante Blatt : DIB)』、『ウィーン・サロン新聞 (Wiener Salonblatt : WSB)』、『ウィーン画報 (Wiener Bilder : WB)』、さらにはドイツ語圏の挿絵入り定期刊行物のパイオニアであり、ウィーンでも広く読まれた『絵入り新聞 (Illustrierte Zeitung : IZ)』の紙面を覗き、皇妃の死がどのように視覚的に表象されたか探してみたい。ここではイラストや写真だけでなく、同じ紙面に掲載された論説文にも注目し、活字と図像の相乗効果による複合的なイメージの形成にも注目する。

①事件現場と犯人の顔

絵入り各紙の紙面にたびたび掲載されていたのが、暗殺現場となったジュネーヴ湖 (レ

マン湖)の沿道を撮影した写真である。そこには、蒸気船の乗り場であるモンブラン埠頭、皇妃が直前まで宿泊していたホテル・ボー・リヴァージュが登場する。また、皇妃の絶命に関しては、蒸気船ジュネーヴ号で昏睡状態に陥る様子を再現した挿絵はあるものの(図1)、犯行の瞬間や臨終を描いた想像図などは見られない。

事件に関連した図像のなかでとりわけ印象的なのは、犯人ルッケーニの写真である。肖像画や警察写真が多数登場したほか、尋問室へ向かう途上、カメラに向かって笑みを浮かべるルッケーニの写真を各紙はこぞって掲載した(図2－図4)。事件に憤慨する読者をあざ笑うかのような不敵な笑みを浮かべるその姿に、見る者は犯人への怒りをかき立てられる。同時に、大胆不敵なアナキストに対する恐怖の念も呼び起こされたことであろう。

そのため、『興趣新聞』が犯人の写真に添えた文章はかなり激烈な口調となっている。紙面では、取り調べの見学を許されたジャーナリストの証言を引き、たびたび笑みを浮かべながら自慢げに犯行を語る凶悪犯のふてぶてしさが印象深く記されている。また、政治に関わらないひ弱な女性、なおかつ息子を亡くし打ちひしがれている不幸な母親を殺害したことに対する激しい怒りが文面からは伝わってくる。「殺人犯は笑い嘲笑している。彼は身の毛もよだつような凶行に歓喜しており、彼はまともでないことをほぼ信じざるを得ない」⁽³⁴⁾。しかも、殉教者への昇華に憧れる犯人が死刑を望んでいるにもかかわらず、裁くジュネーヴ州に死刑制度がないやせなさも語られている。同紙によれば、アフリカ奥地の黒人ですら無実の高尚な女性を殺したりはしないはずであり、そんな卑劣な野獣以下のアナキストは撲滅しなくてはならない、毒蛇を殺し焼き尽くすがごとく、痕跡がなくなるまで根絶やしにすべきであるとされ、論調は無政府主義に対する敵意に満ちている。『オーストリア絵入り新聞』でも、刑に怯えずまったく物怖じせずに笑ってばかりの彼は「まさに人間の姿をした気の狂った怪物である」⁽³⁵⁾と評された。挿絵や写真の入った各紙では、こうした憎悪の文章と写真の視覚効果が合わさることで、ルッケーニの「極悪人像」が形成されることになる。新聞各紙は彼の生い立ちと人生についても触れているが、私生児として生まれ母親に捨てられた過去、貧しい労働者として社会の末端を歩み続けた悲惨な人生に対し同情を寄せる声は聞かれなかった。

②棺の帰還と葬儀の様子

ジュネーヴで客死した皇妃の遺体は、直前まで彼女が宿泊していたホテルの客室に安置され、引き取りのための使者と特別列車が到着するのを4日間待っていた。このジュネーヴにおける安置の様子については、新聞各紙でも連日詳しく伝えられ、ホテルの前に殺到する市民の様子や追悼パレード、棺が駅へ搬送され特別列車でウィーンへ運ばれる過程も写真入りで報道された(図5－図8)。さらには、棺がウィーン西駅に到着しマリアヒルファー通りを王宮へ向かう葬列の様子、そして葬送を見守る大勢の群集の光景を収めた写真や絵も掲載された。9月17日の葬儀当日、つまりカプツィーナ教会に棺が到着した際

の様子も各紙は写真入りで報じ、教会前のノイマルクトをぎっしり埋め尽くす人だかりが特に強烈な印象を残す（図9－図11）。

棺の帰還と葬儀を可視化したこれらの報道によって、新聞読者には荘厳な葬列の様子が印象づけられ、ハプスブルク王家の威信が示されることになる。同時に、葬送に訪れる多くの民衆の姿を紙面に登場させることで、国民が王家と一体であることが印象づけられた。皇妃暗殺事件という国難のなかに見られたこの帝国の一体感は、外国の絵入り新聞でも次のように感知されている。

最近の追悼の日々のなか、オーストリア各地は一種の神の平和に覆われていた。というのも、皇妃を想う心痛や重い試練と向き合う皇帝へのいたわりが、政治的・民族的な闘争や論争を静まり返らせたからである。オーストリア国民の王朝的な心情は、その荒々しい力で互いを隔てる垣根を打ち砕き統合に向かう力を作用させたのである。ひょっとすると、共通の痛みがもたらすこうした強烈な感慨のもとで、和解不可能なように見えた敵同士は近づき、皇妃の棺の上で和解の手を差し伸べ合うことになるかもしれない。これこそ兄弟げんかによって仲たがいの帝国の諸民族が変容した皇妃へささげる最も素晴らしく価値ある供え物となるであろう⁽³⁶⁾。

同様にロンドンの『タイムズ』紙も、即位50周年を襲ったこの悲劇が皇帝への忠誠心と団結心を高めることにつながることを示唆している。「階級と党派を超えて表明された自然発生的な心からの同情は、オーストリア＝ハンガリーの公共生活の場において皇帝と皇室への個人的な忠誠心がまだ強力な要素であり続けることを示している」⁽³⁷⁾。とりわけ、偉大な「ハンガリー女王」マリア・テレジアにも授けられなかった榮譽、すなわち記念像建立の決議がハンガリー議会で即座に満場一致を見た点に『タイムズ』紙は注目していた。

しかしその一方で、王家を中心とした帝国内諸民族の統合がそう簡単ではないことも各紙の記事からは読み取れる。ドイツの『ベルリン日報』は、オーストリア各地で多発するイタリア人に対する暴行事件や騒動を取り上げ、イタリア人ルッケーニの悪行をきっかけに顕在化した帝国諸民族間の亀裂にも触れている⁽³⁸⁾。

③皇妃の追想

これまで見てきたように、新聞各紙の論調は卑劣な犯行を企てたアナキストへの怒りに満ち、厳粛な葬列と葬儀を通して国民が一体となって悲しむ様子が描かれた。それとともに、紙面には生前の皇妃を偲ぶ絵や写真が数多く並び、国民は我らが皇妃の美貌と気高さを視覚的に思い出すことになる。長らく公衆の前から姿を消し、流浪に明け暮れる晩年を過ごした彼女の姿は、こうして「悲劇」を契機に国民の前に再び登場したのである（図12－図21）。掲載された絵や写真の年代も幅が広く、バイエルン公女時代からウィーンへ

の興入れ、そしてオーストリア皇妃としての人生の歩みが図像とともに各紙で振り返られている。そこに描かれる気高く優美で凛とした表情は、44年間この帝国の頂点にいた女性の偉大さを感じ取らせ、特に印象的なのがハンガリーの王妃装束に身を包んだ姿や馬上の勇姿である（図17、図22－図23）⁽³⁹⁾。

こうした図像に感傷的な言説が交わることで、皇妃の神格化がより強められることになる。9月18日付の『オーストリア絵入り新聞』の記事を例に取ろう⁽⁴⁰⁾。「若い時はヨーロッパで最も美しい女性」(S.2)と称賛された皇妃は、晩年もその優美さを失わず、変わらず美しい髪と若い少女のようなスリムな体型を維持できたのは彼女が愛好した運動の賜物とされている。とりわけ彼女が好んだ乗馬や追い狐にも触れ、「ヨーロッパで最高かつ最も勇敢な馬術家」(S.2)として名をはせた数々のエピソードが綴られている。

称えられたのは外見だけではない。皇妃は「最高の母親のうちの一人」(S.2)であり、皇太子の死後においては「皇帝の唯一の支え」(S.3)ともなった。それを例示するエピソードとして、晩年に夫妻が休暇を過ごしたリビエラとカップ・マルタン滞在時のエピソードが紹介されている。この地中海沿岸の保養地において、最愛の息子の死によって負った心の傷を夫婦とともに癒したと記事では伝えられる。こうして、彼女の突然の死は次のように惜しまれるのである。「非常に長い年月にわたり皇帝の傍らで玉座にあり、この間に非常に大きな困難を経験した高貴な女性はその格闘の末に亡くなった。貧者に慈悲深い女性、国民から愛された母、彼女は永遠の眠りについたのである」(S.2)。

皇妃の死を悼む心痛は、彼女の祖国であるドイツの絵入り新聞でも当然のことながら共有されていた。『絵入り新聞』9月15日の付録では、暗殺事件や皇帝の反応とともに皇妃の生涯が次のように追憶される。

皇妃エリザベートは理想的な女性像にふさわしい方であった。愛情、優しさ、気高さ、思慮深さ、あらゆる人道的な悲慘さに対するいたわり、[中略] 根気強く取り組んだ慈善活動、それらは忘れられることなく残り続ける。最も高潔な心臓の一つはその瞬間に鼓動を止めてしまった⁽⁴¹⁾。

非業の死を遂げた皇妃エリザベートは、このように「理想的な女性像」と重ねられ、そうした神格化は各紙に共通して見られる傾向となっていたのである。

④残された皇帝

最後にもう一つ注目したいのが、絵入り新聞紙上の挿絵で目を引く皇帝の痛ましい姿である。『興趣新聞』や『ウィーン画報』では、ウィーンに駆けつけた娘マリー・ヴァレリーと悲しみの対面を果たすシーンが描写されている（図25）⁽⁴²⁾。さらには、犯行現場に居合わせた女官スターライが帰国し報告に訪れた際の挿絵も掲載され、動揺し崩れ落ちる彼

女を皇帝が優しく慰める場面も絵で再現されている（図24）。このように、挿絵の数はさほど多くはないものの、一般の新聞と同様に絵入り新聞でも皇帝の様子に注目が集まり、それらは涙を誘う想像図として読者に提供されていた。新聞には、運命的な婚約から結婚に至る幸福のエピソード、皇妃の花嫁姿や婚礼の様子も挿絵とともに懐古されている（図23、図29）。それだけに、結婚44年目に訪れた突然の別れは、絶望へ追い落とされた皇帝に対する同情をいっそう強める効果を持った（図28）。

とりわけ、皇室霊廟における最後の別れのシーンは痛切である（図26－図27）。非業の死を遂げた息子の棺の横に置かれ静かな眠りにつく皇妃の棺、息子と妻を失った皇帝が彼らの棺の前で孤独に寂しくひざまずく姿には哀愁が漂っている。「老帝が期待をかけたホープであり王家の誇りであった息子、そして過去においては喜びそのものであり現在においては慰めを与えてくれた妻」⁽⁴³⁾、この2人の身内の棺の前で膝から崩れる孤独な皇帝を思いやる文面もそこには添えられていた。図30の『ウィーン画報』には、そのような気落ちした皇帝を優しく見下ろす息子と妻の姿も描かれ印象的な一枚となっている。

おわりに

本稿では、オーストリア皇妃エリザベートの死に注目し、新聞を通して当時の国民やメディアの受け止め方を探ってきた。その反応は、「驚愕」「悲嘆」「憤激」「同情」が入り混じる形で表れていた。つまり、新聞の報道から読み取ることができる人々の言動には、単なる「哀悼」という言葉では言い尽くすことができない多様な心性が見出される。それは、ニュースを伝える側である新聞の論説文にも心情的に表れ、さらには、挿絵と写真を使った視覚表現という点でも紙面に投影されていた。

こうした社会の反応の背景には、皇妃の死が前触れの無い突然の急死であったことがまず理由として挙げられる。重病や重傷、ないしは老衰など、予め心の準備や死の予兆があれば、多少は受け手の衝撃も和らげられたことであろう。しかし、9年前の皇太子ルドルフの自殺と同様、皇妃の死はあまりにも突然の知らせであった。また、皇太子の没後、皇妃は精神的に衰弱し、かつ身体的にも重度の病を患っていた。その療養を目的に訪れたスイスでアナキストの手にかかったことは、人々の悲しみと怒りを増幅させたに違いない。しかも、皇妃は表舞台に立たず政治には関わらない人物であり、警護をつけず無防備な60歳の高齢女性であった。それゆえ、彼女に向けられた刃は極悪非道なアナキストへの怒りを生み、逆にそれだけ皇妃に対する哀れみと情愛の念を深める作用を持つことになる。さらにその哀れみは、残された68歳の老帝にも向けられていた。9年前に跡継ぎである一人息子を失い、弟たちにも次々と先立たれ、今度は最愛の妻を殺された皇帝、苦難続きの彼に人々は心から同情した。治世50周年の記念すべき節目の年、国家に身をささげ公務に励む君主を襲ったこの不幸を前に、国民は団結し皇帝に寄り添う姿勢を示した

のである。

ところが、皇妃の死に際して観察されるこうしたイメージの形成にはいくつか疑問も残る。本稿で見てきたように、皇帝一家の家族愛は新聞各紙で繰り返し語られるが、後世の研究が明らかにしたところでは、生前の皇太子と皇帝の間には深い確執があり、皇帝と皇妃の関係も理想的な夫婦とは言いがたいものであった。皇妃が皇太子から距離を取っていたこともよく知られている。この事実を踏まえると、新聞が報じた皇帝一家の家族愛は史実と乖離しており、美化され過ぎている印象も残る。つまり、皇太子と皇妃がともに悲劇的な最期を迎えたため、美化され神格化が強められたことは否めない。この神話はコルティやハーマンらの優れた伝記で後の時代に崩されていたが、皇妃の死から約1世紀後に誕生したミュージカル『エリザベート』は、より真実に近い家族の姿を世間に知らしめることになったのではないだろうか。

さらにもう一つ、皇妃と国民の距離感についても疑問点が残る。公の場に姿を見せることがほとんどなく存在感の薄らいでいた皇妃の死を、人々はなぜあれほど驚愕し深く悲しんだのであろうか。その背景については本稿でも吟味を重ねてきたが、より深層の本質を見極めるためには、暗殺事件以前の皇妃に関する報道内容も視野に含める必要があろう。さらには、それが死後の皇妃イメージの変遷、ひいては今日の皇妃エリザベート像にどうつながっているのか、今後の検討課題としたい。

(Endnotes)

- (1) Mathieu Deflem, International Police Cooperation: History of, in: Richard A. Wright / J. Mitchell Miller (eds.), *The Encyclopedia of Criminology* (New York, 2005), pp. 795-798.
- (2) ドイツ語での正しい発音は「エリーザベト」であるが、日本では「エリザベート」という呼称が定着しているため本稿ではこちらを用いる。
- (3) 最も定評のある学術的な伝記であるコルティとハーマンの著作も、国民との関係性や皇妃イメージの探究にまでは踏み込まれていない。Egon Caesar Conte Corti, *Elisabeth, «die seltsame Frau»*. Nach dem schriftlichen Nachlaß der Kaiserin, den Tagebüchern ihrer Tochter und sonstigen unveröffentlichten Tagebüchern und Dokumenten, 38. Aufl. (Graz / Wien / Köln, c1934); Brigitte Hamann, *Elisabeth. Kaiserin wider Willen* (Wien, 1981).
- (4) 大井知範「オーストリア皇妃エリザベートの婚礼 ― 新聞が報じたロイヤル・ウェディング ―」『清泉女子大学紀要』第69号、2022年。
- (5) WZ, 11. 9. 1898, Nr. 209, S. 1-6; NFP, 11. 9. 1898, Nr. 12231, S. 2-6.
- (6) WZ, 12. 9. 1898, Nr. 210, S. 1-9; NFP, 12. 9. 1898, Nr. 12232, S. 1-6.
- (7) WZ, 16. 9. 1898, Nr. 214, S. 2-3; OIZ, 25. 9. 1898, Nr. 39, S. 1-7.
- (8) WZ, 16. 9. 1898, Nr. 214, S. 1-2; NFP, 16. 9. 1898, Nr. 12236, S. 1-4.
- (9) Ebenda, S. 1.
- (10) Ebenda, S. 3.
- (11) NFP, 17. 9. 1898, Nr. 12237, S. 2.
- (12) Ebenda.
- (13) OIZ, 25. 9. 1898, Nr. 39, S. 3.
- (14) NFP, 18. 9. 1898, Nr. 12238, S. 2.

- (15) Ebenda, S. 3.
- (16) Ebenda, S. 2-4.
- (17) WZ, 18. 9. 1898, Nr. 216, S. 5-7.
- (18) WZ, 11. 9. 1898, Nr. 209, S. 1.
- (19) Ebenda.
- (20) Ebenda.
- (21) Ebenda, S. 1-6.
- (22) 『新自由新聞』の経営史と政治的傾向については以下の文献を参照。Adam Wandruszka, *Geschichte einer Zeitung. Das Schicksal der „Presse“ und der „Neuen Freien Presse“ von 1848 zur Zweiten Republik* (Wien, 1958).
- (23) NFP, 11. 9. 1898, Nr. 12231, S. 1-2.
- (24) Ebenda, S. 2-5.
- (25) Ebenda, S. 5.
- (26) NFP, 12. 9. 1898, Nr. 12232, S. 1.
- (27) NFP, 16. 9. 1898, Nr. 12236, S. 1.
- (28) Ebenda.
- (29) Ebenda.
- (30) Ebenda.
- (31) Ebenda.
- (32) 大井知範「19世紀中葉のドイツにおける『ライプツィヒ絵入り新聞』の登場とその意義 — ノヴァラ号の世界周航(1857－59)に関する報道を事例として —」『政治学研究論集』(明治大学) 第22号、2005年。
- (33) 大井知範「19世紀ドイツの東アジア像と帝国主義進出 — 絵入り新聞に映し出された世界認識 —」『史学研究』第303号、2019年。
- (34) DIB, 22. 9. 1898, Nr. 38, S. 9.
- (35) OIZ, 18. 9. 1898, Nr. 38, S. 8.
- (36) IZ, 22. 9. 1898, Nr. 2882, S. 384.
- (37) *The Times*, 12. 9. 1898, No. 35619, p. 3.
- (38) *Berliner Tageblatt*, 13. 9. 1898, Nr. 465 Abend-Ausgabe. この問題に関しては、ウィーンの『新自由新聞』でも触れられている。ホーフブルクに集ったある労働者の一団から、「イタリア人は我々からパンを奪い、我々の皇妃を殺した！」と敵意むき出しの叫び声が聞かれる一方で、事件は一人のならず者の犯行でありイタリア人に矛先を向けてはいけなく冷静に論ずる声が発せられた事実も報じられている。NFP, 11. 9. 1898, Nr. 12231, S. 3.
- (39) DIB, 15. 9. 1898, Nr. 37, S. 3; WSB, 17. 9. 1898, Nr. 38, S. 5; OIZ, 18. 9. 1898, Nr. 38, S. 6; WB, 18. 9. 1898, Nr. 38, S. 9.
- (40) OIZ, 18. 9. 1898, Nr. 38, S. 1-11.
- (41) IZ, 15. 9. 1898, Nr. 2881 Beilage, S. 4.
- (42) DIB, 29. 9. 1898, Nr. 39, S. 1-6.
- (43) DIB, 22. 9. 1898, Nr. 38, S. 3.



図1 下段「船上で担架に乗せられる瀕死の皇妃」
(DIB 1898年9月15日付)



図2 上段「予審判事のもとに護送される殺人犯ルッケニ」
(DIB 1898年9月22日付)



図3 上段「ジュネーヴ警察中庭で尋問へ向かう途上のルッケニ」
(WB 1898年9月19日付)



図4 下段「ジュネーヴの監獄における殺人犯ルッケニ」
(IZ 1898年9月22日付)



図5 上段「皇妃が息を引き取る際に頭の下に敷いていたクッション」、下段「ジュネーヴのホテル・ボー・リヴァージュに安置される皇妃」
(DIB 1898年9月22日付)



図6 上段「ジュネーヴ駅を出発する皇妃の棺を乗せた列車」、下段「ウィーン・ホーフブルク教会における皇妃の棺の安置」
(DIB 1898年9月22日付)



図7 「皇妃の棺台に哀悼の意を捧げるオーストリア国民」
(OIZ 1898年9月18日付)



図8 上段「ジュネーヴのホテル・ボー・リヴァージュにおける安置」、下段「9月14日のジュネーヴ駅への棺の移送」
(IZ 1898年9月22日付)



図9 上段「ホテル・ボー・リヴァージュにおける死者礼拝室の写真」、下段「ホーフブルクを出発する葬列の写真」
(OIZ 1898年9月25日付)

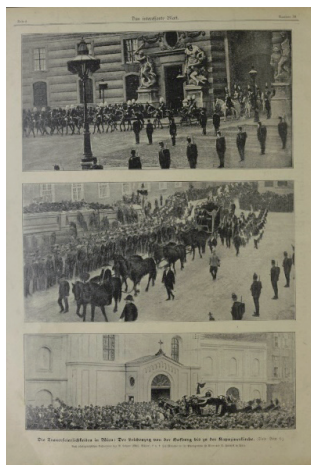


図10 「ホーフブルクからカプツィーナ教会までの葬列」
(DIB 1898年9月22日付)



図11 上段「ジュネーヴ駅に到着した葬列の写真」、下段「カプツィーナ教会に運ばれる皇妃の棺」
(OIZ 1898年9月25日付)



図12 「皇妃の最後に撮影された写真をもとにした肖像画」
(DIB 1898年9月15日付)



図13 「皇妃エリザベート」
(WB 1898年9月18日付)



図14 「皇妃エリザベート」
(WSB 1898年9月17日付)



図15 「オーストリア皇妃エリザベート」
(WSB 1898年9月24日付)



図16 「オーストリア皇妃ハンガリー王妃エリザベート (ミュンヘン王立ピナコテーク)」
(IZ 1898年9月22日付)



図17 「皇妃エリザベート ブダペストで撮影された写真をもとに」
(IZ 1898年9月15日付録)



図18 「皇妃エリザベート」
(OIZ 1898年9月18日付)



図19 「カールスパートのヒル
シェンシュブルグにおける
オーストリア皇妃エリザベ
ート（原画1892年）」
（IZ 1898年9月15日付録）



図20 「皇妃エリザベート」
（WSB 1898年9月24日付）



図21 上段「皇太子の結婚
時の皇妃エリザベート」、
下段「1859年の皇帝一
家」
（WB 1898年9月18日付）



図22 「皇妃の青少年期の肖像
画 ポッセンホーフェン城
における公女エリザベ
ート」
（WB 1898年9月19日付）



図23 左上段「結婚1年目」、右
上段「1867年にハンガリ
ーの民族衣装をまとった姿」、
下段「1854年4月の皇帝皇
妃の結婚式」
（DIB 1898年9月15日付）



図24 「皇妃の最期について皇
帝に語るスターライ伯爵夫
人」
（DIB 1898年9月29日付）



図25 上段「ウィーンに届いた最初の訃報」、下段「皇帝フランツ・ヨーゼフとマリー・ヴァレリー大公妃」
(WB 1898年9月18日付)



図26 「カプツィーナ霊廟で皇妃に別れを告げる皇帝」
(DIB 1898年9月22日付)



図27 「皇妃エリザベットの棺に別れを告げる皇帝」
(OIZ 1898年9月25日付)

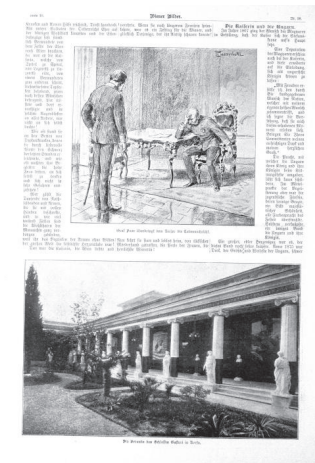


図28 上段「パール伯爵から皇妃死去の知らせを受ける皇帝」
(WB 1898年9月18日付)



図29 「ある晴れた日より1854年シェンブルンの庭園における新婚の皇帝夫妻」
(WB 1898年9月18日付)

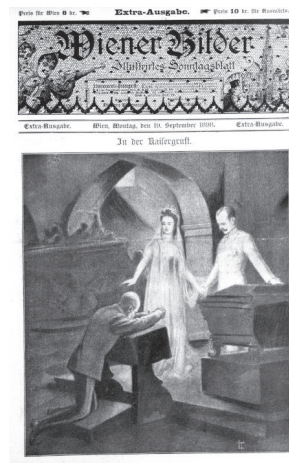


図30 「皇室霊廟において」
(WB 1898年9月19日付)